

---

# 二度目の春

よっちい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二度目の春

### 【Nコード】

N0686C

### 【作者名】

よつちい

### 【あらすじ】

夏休み明けの始業式。俺はあの子が引越してしまったことを知る。猛烈に後悔した俺。その帰りにおかしな老人に過去に戻れると言われ……。

# 1・中3 夏（前書き）

初めて書く小説なので可笑しな所があちこちに  
ありますが・・・  
よかったです読んでください。

## 1・中3 夏

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

俺は見慣れた団地の前をとぼとぼと歩く。

俺は学ランの右ポケットからいつもの銘柄のタバコと百円ライターを取り出した。

一本出して吸おうとする。

周りの目など気にしない。

大人からの説教など慣れているから。

仮に注意などされても俺は無視するだろう。

全ていつもどおり。

俺は中学2年の夏ころから不良と言われ始めた。

喫煙のほかにも気軽には言えないようないろいろな悪いことをやった。

俺の見た目や行動を説教してくる大人はたくさんいる。

補導・説教はうっとおしいものだけれどそんな自分がかっこいいと思ってた。

俺は橋に差し掛かった。

ふと川を見ていたくなり橋の手すりに両肘をかけた。

そういえば、俺はカッコよくなりたくて不良になったわけじゃなかった。

中2の春ごろ。

俺は葵と喧嘩したんだ。

しかも原因も忘れてしまったようなとてもささいなことから始まった喧嘩だ。

この橋は俺と葵が仲良かったころ下校の時二人で何回も通った。

俺と葵は家が隣同士で幼馴染みという仲だった。

俺は葵のことが好きだった。

だけど俺は意地っ張りだから、仲直りなんかできなかったんだ。

そしていつのまにか互いを無視するようになってた。

俺はその寂しさを埋め合わしたかったんだ。

そして俺はいつのまにか不良に誘われて不良になってた。

俺は口にくわえたタバコを川に向かって吹き捨てた。

ふと俺の肩を誰かが叩く。

また地域住民からの説教か。

俺は振り向く。

俺の肩を叩いたのは白髪の老人だった。

「なんだよ、じじい」

俺は何か文句でもありますが、というふうになその老人をにらむ。

「悩んでおるな、少年」

「はあ？ 仮に悩んでもアンタには関係ねえ。うせろ」

老人は俺にびびる様子もなく続けた。

「少年よ、過去に戻ってやり直させてやろうか？」

どうやら説教ではないようだ。

それにしても、この老人ぼけてしまっているのか？

俺は呆れた口調で言う。

「じじい、寝ぼけてんなら目えさませ」

「最初はみんな信じない、でも本当に戻れるんじゃ」

老人は真顔で言った。

俺は呆れたように言う。

「するとアンタはドラえもんか」

「それならお前さんはのび太君じゃ、もおええ。一生後悔しておればええ」

老人は俺に背を向けて去っていきこうとした。

俺は一生後悔という言葉に不安になり慌てて声をかけなす。

「ちよっ！分かった！信じるっ！信じるから！」

老人は俺を呆れたような目付きで見た。

「しょうがないのお、じゃあ3000円」

老人は俺に手の平を差し出す。

「金取んのかい！」

「そうじゃ、世の中は金で動いておるんじゃ。でも良いじゃないか、過去に戻るんじゃ」

「じゃあ最初に方法を教えてくれよ」

「だめじゃ、逃げるかもしれんからな」

俺は少し嫌な顔をしてみたがそれでなにも変わるはずはなく、しぶしぶ財布から野口英世を三枚取り出して老人の手の平にのせた。

「っで？方法は？」

老人はおもむろにポケットに手を入れ、懐中時計のようなものを取



り出す。

「これじゃ」

「その懐中時計で？ありがちな」俺は文句を言う。

「使わなくてもよいんじゃない？」

「ウソだよ！ウソ！冗談でしたあ！言ってみただけえ！」

これで過去に帰ることが出来なかったら俺はこの老人を川に投げ落とすかもしれない。

「まっ、使い方は分かるじゃろ。」

老人は時計を投げよこす。

俺は時計をじっくりと眺める。

そして俺は気付き、顔を上げて言う。

「おい！この時計、針がねえぞ！」

しかし俺の周りに老人はいなかった。

「消えた・・・」

俺は完璧にぼったくられたことに気付いた。

俺は全てに悲しくなり時計を川に投げ捨てようとした。

しかし俺はそれをやめ右ポケットにしまった。

家に付くと、もう8時をまわっていた。

母親にただいま、と言って俺は二階にある自分の部屋へ向かった。

俺は自分のベッドに勢いよく飛びつく。

仰向けになりなんとなく窓を見る。

葵の部屋と俺の部屋の窓は向かい合っている。

俺と葵が仲良かったころ、俺と葵は夜中に窓辺と窓辺で話したりしてた。

けれど今、葵の部屋の電気はいつまでたってもつかないだろう。

葵は昨日引越してしまったから。

理由は親の急な転勤らしかった。

クラスでも知っている人がいないくらい本当に急な転校だった。

実際、俺がこのことを知ったのも今日の始業式でだ。

俺は今、猛烈に後悔している。

もう一度中学校生活をやり直したい。

俺はこの行き場のない思いをベッドにぶつけようとベッドの上で激しく暴れる。

少し涙が出てきた。

ふと、右太ももの辺りにゴツゴツと違和感。

俺は涙を布団で拭いてそれを触ってみる。

忘れていた。

ぼったくりで買ってしまったと思われる懐中時計だ。

もし。

もしもあの老人の言っていたことが本当だったら。

俺は右ポケットからそれを取り出してみた。

どうやって使うのだろうか。

針がない。

なかなか重くて金色である。

しかしこれはどこからどうみても壊れているというやつである。

俺はしばらく時計を見ていたがなぜか眠くなり、いつの間にか寝てしまっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0686c/>

---

二度目の春

2010年10月28日06時28分発行